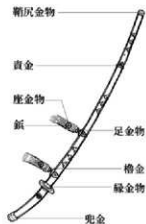






A地点出土の鋳型



太刀の各部名称

倉時代前半に最も盛んであったことがわかる。

また、左京八条二坊の西洞院大路に隣接したF・G地点の調査では鋳物の生産跡を確認している。ここでは埴塙・金属のカス・焼土の塊などがはいった穴を検出しており、野鍛冶跡と推定している。出土遺物から八条三坊のA～E地点と同じく鎌倉時代から室町時代の遺構と考えられ、この周辺で広く鋳物の生産が行なわれていたことが知れる。

A地点で出土した鋳型には、刀装具の兜金が鞘尻金物とみられるもの(3・5)、座金物(1・6)、緑金物(2)、鉄(4)、釘(9)や不明のもの(7・8)がある。その他、各種の埴塙や櫛の羽口などが出土した。ここでは工房の一部とみられる遺構が2基ある。掘りくぼめた穴の中に礫・瓦・埴塙などを入れて突き固めたもので、1基には石組の痕跡が残る。上部に炭が堆積し、多量の焼土の塊を含む。鋳型や埴塙などの鋳造用具が

集中してここから出土した。操業期間は限定できないが、おおよそ鎌倉時代後半から室町時代中頃と考えられる。

刀装具などの鋳型は、5～6cm程の破片がほとんどで、8cmを越すものはない。型の内面は緻密な粘土を薄く延べ、中間はスサ混りの土、外側に砂を多量に含む土を用いた3層の構造である。残存状況の良好な鋳型には、溶けた金属を流し込む湯口や型合せのしりがみられる。型と製品の剥離剤に雲母片が用いられる。花瓶などの大型品の鋳型も基本的には同じであるが、中間や外側より粗い土が用いられる。

なお、埴塙に付着した金属の蛍光X線分析を行なった結果、銅・錫・鉛が認められ、青銅に近い合金という報告を得ている。また、小型の埴塙の一部には金・銀を溶した痕跡がみられるものもある。

平安京には、官営の市である東市と西市が置かれていた。10世紀後半には右京の衰退とともに西市

はその機能を失い、東市(現在の西本願寺付近)が主体となり、その周辺に人々が集まり生活するようになる。そして、平安時代末期から鎌倉時代には左京八条三坊の一角にあたる七条町に市が立ち、商工業が繁栄し東市にとってかわる。朱雀大路以東、七条大路以南の地には藤原氏などの貴族や平氏一門の邸宅が立ち並んでいたことが知られており、これらの人々との関係が七条町の商工業をさらに発展させたと考えられる。

出土した鋳型は、七条町境界の鋳物師、さらには鍛冶・細工に携わる人々の姿を彷彿させる。のみならず、これらの手工業者を取り巻く商人たちもいただろう。町の繁栄や賑わいを連想させずにはいられない。

しかし、七条町も室町時代になると衰退の兆しを見せ始め、応仁の乱以後、一帯は荒廃し、やがて水田と化していく。再び活気を取り戻すのは明治になり京都駅が設置されてからである。